37

『史記会注考証』と『扁鵲倉公伝彙攷』の関係

宮川浩也

一、はじめに

『史記会注考証』（『考証』）は滝川亀太郎（一八六五～一九四六）が著した『史記』の注釈書である。小川環樹は「滝川亀太郎氏の『史記会注考証』は、古来の注釈の集大成であり、同時に現在最良のテクストでもある。テクストの校訂にはわが国に伝わる古写本を用い、注は三家のほか、清朝学者の説を採り入れ、さらに江戸時代の学者の説を採った。それらは無条件に集めてあるのではなく、その取捨には著者の高い見識があらわれている」（『史記列伝』第四冊、岩波文庫）というほど、最善の注釈書としてほまれが高い。『扁鵲倉公伝彙攷』（『彙攷』）は、多紀元簡（一七五四～一八一〇）の著で、元胤・元堅の補注がある。考証学の成果が盛り込まれた注釈で、江戸時代を代表するものである。本稿では、『考証』が相当程度『彙攷』に依拠して成立していることを明らかにし、『考証』の引用者名の誤りは『彙攷』によって正すことができることを提示する。

二、引用文の検討

『考証』には、注釈者名を明記した引用文（二百八十九条）があり（三家注を除く）、巻末の「史記考証引用書目挙要」（「引用書目」）で注釈者名を確認できる。

中国人では、二〇家、合計八十七回引用される。その内「引用書目」に見える者は十七家である。「引用書目」に見えないのは三家で、王引之は王念孫の『読書雑誌』から、蔣西谷は『彙攷』の多紀元胤注からの引用である。廖文英については不明。

日本人では、一〇家、合計二〇二回引用される。その内「引用書目」に見える者は七家である。「引用書目」に見えないのは稲葉元熙・海保元備・堀川済の三家で、いずれも『彙攷』からの孫引きである。「引用書目」に見えるものでも、『彙攷』からの孫引とみなすべきものもある。滝惟寅（三十七回）、これは浅井図南説で、引用書目に

『扁倉伝割解』がある。直接に引用したものとも考えられるが、三十七回の内、多紀元簡が一回、多紀元胤が一回、多紀元堅が三十四回、それぞれ同じ文章を引用するから（残り一回は直接の引用だろうが）、ほとんどが『彙攷』からの孫引きと考えられる。それを証する例を挙げる。「滕維寅曰、素問云、黄帝問曰、有病温者、汗出、輒復熱、而脈躁疾、不為汗衰、不能食、病名為何、岐伯曰、病名陰陽交、交者死也、王冰曰、交、謂交合、陰陽之気不分別也」（三十一頁）の「王冰曰」以下は『割解』には見えない。この文章は多紀元堅が「滕惟寅曰」と引用して、そして「王冰曰」と補追したものを、滝川がそれを区別せずに採り込んだのである。滕正路（三回）、これは浅井正路説だが、滕惟寅説と同様である。

結局、『彙攷』由来と考えられる注釈文は、多紀元簡（五十二回）・元胤（二十二回）・元堅（三十九回）はむろんのこと、稲葉元熙（一回）・海保元備（二十九回）・堀川済（一回）、そして『扁倉伝割解』の図南（三十七回）・正路（三回）もそうだとすれば、八家合計一八四回となる。日本人の注釈文の九割が『彙攷』由来の注釈ということになる。『考証』がいかに『彙攷』に依拠しているかがわかる。残る中井積徳（八回）と岡白駒（十回）の二家だけが直接の引用である。

三、注釈者名の誤記

『考証』に引用される注釈者名には誤記がある。大半は『彙攷』と関係が深い。その例を挙げる。「多紀元簡曰、曲礼、衣毋撥、注、撥、発揚貌」（九頁）は元胤注であり、「多紀元簡曰、御覧注、遂、音隊、並与墜通、正義引素問、今無所攷」（十四頁）の「正義」以下は元堅注である。注釈者名の誤りは二十九箇所に及び、ほとんどが『彙攷』と関わりが深いので、誤りがあればそれを訂正することができる。『考証』を利用するには、引用状況を『彙攷』によって確認する必要がある。

（北里研究所東洋医学研究所医史学研究部）